

杜子春

芥川龍之介



或春あるの日暮ひぐしです。

唐とうの都洛陽らくようの西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名を杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費つかい尽して、その日の暮しにも困る位、憐あわれな身分になっているのです。

何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、繁昌はんじやうを

極きわめた都ですから、往来にはまだしつきりなく、人や車が通つていました。門一ぱいに当っている、油のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗しやの帽子や、土耳古トルコの女の金の耳環みみわや、白馬しろうまに飾った色系の手綱たづなが、絶えず流れて行く容子ようすは、まるで画の

よくな美しきです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭もたせて、ぼんやり空ばかり眺ながめていました。空には、もう細い月が、うらうらと靡なびいた霞かすみの中に、まるで爪の痕あとかと思う程、かすかに白く浮んでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行つても、泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまった方がましかも知れない」

杜子春はひとりきつきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。

するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目すがめ眇めがの老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を

門へ落すと、じつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。

「私わたしですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしました。

「そうか。それは可哀そうだな」

老人は暫しばらく何事か考えているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、

「ではおれが好いいことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中よなかに掘つて見るが好いい。きつと車に一ぱいの黄金おうごんが埋うまっている筈はずだから」

「ほんとうですか」

杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げました。ところが更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりに
はそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は
前よりも猶なお白しろくなつて、休まない往来の人通りの上には、もう
気の早い蝙蝠こうもりが二三匹ひらひら舞っていました。

二

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯ただ一人という大金持にな
りました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その
頭に当る所を、夜中にそつと掘つて見たら、大きな車にも余る
位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になつた杜子春は、すぐに立派な家を買つて、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な暮らしをし始めました。蘭陵の酒を買わせるやら、桂州の竜眼肉をとりよせるやら、日に四度色の変わる牡丹を庭に植えさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼にするやら、玉を集めるやら、錦を縫わせるやら、香木の車を造らせは、いつになつてもこの話がおしまいにならない位です。

するとこういう噂を聞いて、今までは路で行き合つても、挨拶さえしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやつて来ました。それも一日毎に数が増して、半年ばかり経つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になつてしまつたのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛な

ことは、中々口には尽されません。極かいつまんだだけをお話なかなかしても、杜子春が金の杯さかずきに西洋から来た葡萄酒ぶどうしゅを汲んで、天竺てんじく生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠ひすいの蓮はすの花を、十人は瑪瑙めのうの牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏ふししているという景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。そうすると人間は薄情なもので、昨日きのうまでは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなつてしまいました。い

や、宿を貸すどころか、今では椀わんに一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、片目眇すがめの老人が、どこからか姿を現して、

「お前は何を考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と、恐る恐る返事をしました。

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その胸に当る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつている筈だから」

老人はこう言つたと思うと、今度もまた人ごみの中へ、掻き消すように隠れてしまいました。

杜子春はその翌日から、忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使——すべてが昔の通りなのです。ですから車に一ぱいにあつた、あの夥おびただしい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなつてしまいました。

「お前は何を考えているのだ」

片目^{すがめ}眇の老人は、三度^{どとししゅん}杜子春の前へ来て、同じことを問いか

けました。勿論^{もちろん}彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破っている三日月の光を眺めながら、ぼんやり^{たたず}佇んでいたのです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思つているのです」

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好きなことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その腹に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの——」

老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮さへぎりました。

「いや、お金はもういらなないのです」

「金はもういらない？ ははあ、では贅沢ぜいたくをするにはとうとう飽きてしまったと見えるな」

老人は審いぶかしそうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢ぜいたくに飽きたのじゃありません。人間というものに愛想あいそがつきたのです」

杜子春は不平そうな顔をしながら、突慳貪つっけんどんにこう言いました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞ついでごとも追従ついでもしますけれど、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔やさしい顔さえ

もして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持になつたところが、何にもならないような気がするのです」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出しました。「そうか。いや、お前は若い者に似合わず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか」

杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思い切つた眼を挙げると、訴えるように老人の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子になつて、仙術せんじゆつの修業をしたいと思うのです。いいえ、隠してはいけません。あなたは道德の高い仙人でしょう。仙人でなければ、一夜ひとよの内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈

です。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教えてください」
老人は眉まゆをひそめたまま、暫くは黙つて、何事か考へているようでしたが、やがて又につこり笑いながら、

「いかにもおれは峨眉山がびさんに棲すんでいる、鉄冠子てつかんしという仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好きそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と、快ねがいく願いを容いれてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鉄冠子に御時宜おじぎをしました。

「いや、そう御礼などは言つて貰うまい。いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第

で決まることだからな。——が、ともかくもまずおれと一しよに、峨眉山の奥へ来て見るが好い。おお、幸さいわい、ここに竹杖たけづえが一本落ちてゐる。では早速これへ乗つて、一飛びに空を渡るとしよう」

鉄冠子はそこにあつた青竹を一本拾い上げると、口の中うちに咒文じゅもんを唱えながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るようまたがに跨りました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽ち竜のように、勢いきおいよく大空へ舞い上つて、晴れ渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

杜子春は胆きもをつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明ゆうあかりの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、(とうに霞に紛れたのでしよう)どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白びんい鬢の毛を風に吹かせて、

高らかに歌を唱うたい出しました。

あした

朝あしたに北海しゆうりに遊あそび、暮くれには蒼梧そうご。

袖裏しゆりの青蛇せいだ、胆氣たんき粗そなり。

三たび岳陽くわくやうに入いれども、人識しらず。

朗吟らうぎんして、飛過ひかす洞庭湖どうていこ。

四

二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉さか山へ舞まい下くだりました。

そこは深い谷に臨まんだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よく

よく高い所だと見えて、中空なかぞらに垂たれた北斗ほくたうの星ほしが、茶碗程ちやわんの大

きさに光あっていました。元もとより人跡じんせきの絶たえた山ですから、あた

りはしんと静しずまり返かえって、やつと耳みみにはいるものは、後うしろの絶壁たつ

に生はえている、曲りくねった一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「おれはこれから天上へ行つて、西王母せいおうぼに御眼にかかつて来るから、お前はその間に坐つて、おれの帰るのを待つているが好いい。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性ましようが現れて、お前をたぶらかさうとするだろうが、たといどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言ひとことでも口を利きいたら、お前は到底仙人にはなれないものだどと覚悟をしろ。好いいか。天地が裂けても、黙もくっているのだぞ」と言いました。

「大丈夫です。決して声などは出しません。命がなくなつても、黙もくっています」

「そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行つて来るから」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨つて、夜目にも削つたような山々の空へ、一文字に消えてしまいました。

杜子春はたった一人、岩の上に坐つたまま、しずか静に星を眺めていました。するとかれこれはんとき半時ばかり経つて、深山の夜気が肌寒く薄い着物にとお透り出した頃、突然空中に声があつて、

「そこにいるのは何者だ」と、叱りつけるではありませんか。しかし杜子春は仙人のおしえ教通り、何とも返事をしませんでした。ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、

「返事をしないと立ちどころに、命はないものと覚悟しろ」と、いかめしくおど嚇しつけるのです。

杜子春は勿論黙っていました。

と、どこから登って来たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上って、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思うと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇が一匹、炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐っていました。虎と蛇とは、一つ餌食を狙って、互に隙でも窺うのか、暫くは睨合いの体でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に呑まれるか、杜子春の命は瞬く内に、なくなってしまうと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さっきの通りこうこうと枝を鳴らしているばかりな

のです。杜子春はほつと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待っていました。

すると一陣の風が吹き起つて、墨のような黒雲が一面にあたりをとぎすや否や、うす紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄じく雷らいが鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑たぎのような雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変なかの中に、恐れ気げもなく坐つていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、――暫くはさすがの峨眉くつがえ山も、覆くつがえるかと思つた位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟とどろいたと思つたと、空に渦卷うずいた黒雲の中から、まっ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。

が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳そびえた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯いたずらに違いありません。杜子春は漸ようやく安心して、額の冷汗ひやあせを拭ぬぐいながら、又岩の上に坐り直しました。

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐っている前へ、金の鎧よろいを着下きくだした、身の丈三丈たけもあろうという、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉みつまたの戟ほこを持っていました。が、いきなりその戟の切先きつさきを杜子春の胸むなもとへ向けながら、眼を嗔いからせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉山という山は、天地開闢かいはくの昔から、おれが住居すまいをしている所だぞ。それも憚はばからずたつた

一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と言うのです。

しかし杜子春は老人の言葉通り、默然もくねんと口を噤つぶんでいました。「返事をしないか。——しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属けんぞくたちが、その方をずたずたに斬きつてしまおうぞ」

神将は戟を高く挙げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充満みちみちて、それが皆槍やりや刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。

この景色を見た杜子春は、思わずあつと叫びそうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思い出して、一生懸命に黙つてい

ました。神将は彼が恐れのないのを見ると、怒おこつたの怒らないのではありません。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ」

神将はこう喚わめくが早いか、三叉の戟ひらめを閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。そうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしまいました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のように消え失せた後だったのです。

北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変らず、こうこうと枝を鳴らしています。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰あおむ向けにそこへ倒れていました。

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れていましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、閻穴道あんけつどうという道があつて、そこは年中暗い空に、氷のような冷たい風がぴゅうぴゅう吹き荒すさんでいるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木この葉のように、空を漂つて行きましたが、やがて森羅殿しんらでんという額がくの懸かかつた立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にいた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまわりを取り捲まいて、階きざはしの前へ引き据まえました。階の上には一人の王様が、まっ黒な袍きものに金の冠をかぶつて、いかめしくあたりを睨にらんでいます。これは兼ねて尊うわさに聞いた、閻魔大王えんま

に違いありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪ひざまずいていました。

「こら、その方は何の為ために、峨眉山の上へ坐つていた？」

閻魔大王の声は雷らいのように、階の上から響きました。杜子春は早速その問に答えようと思いましたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利きくな」という鉄冠子の戒いましめの言葉です。そこで唯頭かしらを垂れたまま、唾おしのように黙つていました。すると閻魔大王は、持つていた鉄の笏しやくを挙げて、顔中の鬚ひげを逆立てながら、「その方はここをどこだと思ふ？すみやか速すみやかに返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責かしゃくに遇あわせてくれるぞ」と、威丈高いたけだかに罵ののしりました。

が、杜子春は相変らず唇くちびる一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言いつける

と、鬼どもは一度に畏かしこまつて、忽たちまち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞い上りました。

地獄には誰でも知っている通り、劍つるぎの山や血の池の外にも、焦熱地獄という焰ほのおの谷や極寒地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、代る代る杜子春を抛ほうりこみました。ですから杜子春は無残にも、劍に胸を貫かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥はがれるやら、鉄の杵きねに撞つかれるやら、油の鍋なべに煮られるやら、毒蛇に脳味噌のうみそを吸われるやら、熊鷹くまたかに眼を食われるやら、——その苦しみを数え立てていては、到底際限がない位、あらゆる責苦せめくに遇あわされたのです。それでも杜子春は我慢強く、じつと歯を食いしばったまま、一言ひとことも口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆あきれ返ってしまったのでしよう。

もう一度夜のよるのような空を飛んで、森羅殿の前へ帰つて来ると、さっきの通り杜子春を階きざはしの下に引き据えながら、御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても、ものを言う気色けしきがございません」と、口を揃そろえて言上ごんじょうしました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見えて、

「この男の父母ちちははは、畜生道ちくしやうどうに落ちてゐる筈だから、早速ここへ引き立てて来い」と、一匹の鬼に言いつけました。

鬼は忽ち風に乗つて、地獄の空へ舞い上りました。と思うと、又星が流れるように、二匹の獣けものを駆り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといえればそれは二匹とも、形

は見すばらしい瘦せ馬やでしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思いをさせやるぞ」

杜子春はこう嚇おどされても、やはり返答をせずにいました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さえ都合が好ければ、好いいと思つているのだな」

閻魔王は森羅殿も崩くずれる程、凄すさまじい声で喚わめきました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ」

鬼どもは一斉に「はっ」と答こたえながら、鉄の鞭むちをとって立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未積みしやくなく打ちのめしまし

た。鞭はりゆうりゆうと風を切つて、所嫌きらわず雨のように、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、——畜生になつた父母は、苦しそうに身を悶もたえて、眼には血の涙を浮べたまま、見てもいられない程いみな嘶なき立てました。

「どうだ。まだその方は白状しないか」

閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は碎けて、息も絶え絶えに階きざはしの前へ、倒れ伏していたのです。杜子春は必死になつて、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊かたく眼をつぶっていました。するとその時彼の耳には、殆ほとんど声とはいえない位、かすかな声が伝わつて来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王

が何と仰つても、言いたくないことは黙つて御出で」

それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じつと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何という健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん」と一声を叫びました。……

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇たたずんでいるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」

片目眇すがめの老人は微笑を含みながら言いました。

「なれません。なれませんが、しかし私わたしはなれなかったことも、反かえって嬉しい気がするのです」

杜子春はまだ眼に涙を浮べたまま、思わず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、

鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」「もしお前が黙っていたら——」と鉄冠子は急に厳おごそかな顔になつて、じつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまおうと思つていたのだ。——お前はもう仙人になりたいという望のぞみも持つてしまい。大金持になることは、元より愛想が付きた筈はずだ。ではお前はこれから後、何になつたら好いいと思うな」「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩こもつていました。

「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇あわないから」

鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していました。急にな

足を止めて、杜子春の方を振り返ると、
「おお、幸さいわい、今思い出したが、おれは泰山たいざんの南の麓ふもとに一軒の家
を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住
まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いて
いるだろう」と、さも愉快そうにつけ加えました。

杜子春

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社
1968（昭和 43）年 11 月 15 日発行
1989（平成元）年 5 月 30 日 46 刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2005 年 1 月 7 日作成

2005 年 11 月 23 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。